

### 災害の特徴

災害の特徴を一言で言えば、『意地が悪い』ということになる。

(1)油断させておいて突然おそう

来ると思っていると来ない(例:東海大地震の場合地震が発生すると言われ続けてすでに30年近く経過)。逆に、来ないと思っていると来る(例:阪神淡路大地震)

(2)頻繁には来ない

地震の多い日本でも大地震に遭遇するのは通常一生に一回あるかどうか、というレベル。

(3)弱点をついてくる

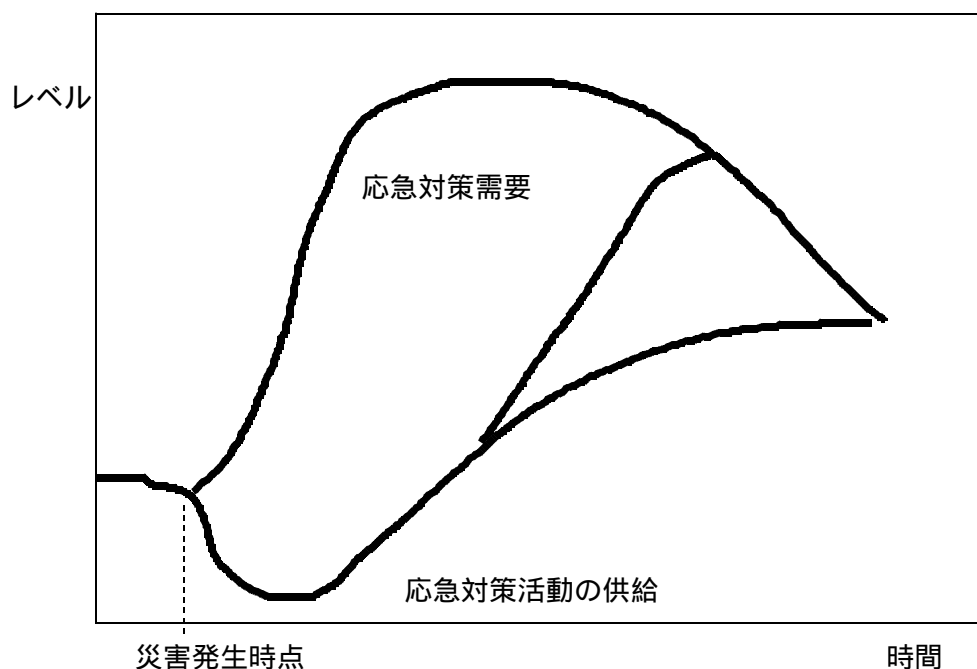
常識では来ないと思っている地域をおそうことがある。(例:伊勢湾台風での急な進路変更。また阪神淡路大地震ではここ30年間に大地震が発生する可能性は4~9%の確率と言われており来てもおかしくはないレベルであったが実際はそこに住んでいた人に見れば阪神地域に大地震が来るとは思っていなかったケースが多い)

### 災害を応急対策の受給バランスから見ると・・・

地震 被害 応急対策需要 (地域限定・膨大な量・時間的制約)

VS

応急対策活動の供給 (広域・多様な組織・ボランティア・時間が遅れやすい)



【課題】この応急対策の需要と供給のバランスを埋める手段は「情報」であり、具体的な中身は

需要がどこにどれだけあるか ————— 情報通信ボランティアの役割

供給がどこにどれだけあるか —————  
それを結ぶ手続きはどうすればいいか ———— 防災機関の役割

を明らかにすること。

阪神淡路大震災を例にとると・・・・・・・・

(1) 生き埋めになった人数は数万人

このうち自力で脱出した人も3割強いたが、救出された人の割合は17%（うち身動きができた人7%、身動きができなかった人10%）

(2) 出火原因が多かったものはガス絡みで79件中22件

消火活動ができなかった理由の1位は水も道具も無かった61%、2位は火災が激しく消火不可能45%だった。

(3) 病院外来患者数の偏り

西宮市の例として、ある病院では1000人を越す負傷者でゴった返したにもかかわらずすぐ近隣の兵庫医大付属病院に訪れた外来患者はいくらもなかった。

(4) ヘリコプターによる患者の搬送

ヘリコプターは10数機も使用できる状態であり、救急救命を要する患者も多かったが、実際にヘリコプターで搬送された患者は1名だった。

(5) 病院が機能不全に陥った最大の原因は電話の不通・混乱

(6) 学校が地域の情報源として有効に働く

### 地震直後にすべきこと

(1) 自分や家族の身の安全確認 確保

(2) 体感の揺れとラジオからの情報で被害の全体像を推定（テレビが「飛ぶ」ような地震規模だと震度7以上。震度情報では、震度6弱と表現している場合はそうでもないが、震度6強と表現している場合は大災害になる可能性が大きい）

(3) 被害が大きそうな場所で情報が鍵となる場所に行く（近所・避難所・病院・市町村役場など）

(4) 情報のとりまとめと域外への伝達

以上